

Henri Gouhier, *Bergson dans l'histoire de la pensée occidentale*, Chapitre VIII “Le Dieu de *L'Évolution créatrice*”におけるアリストテレスと聖トマスの神について

土 屋 靖 明

序

この研究ノートは、『八戸大学紀要』第43号に掲載された研究ノート「Henri Gouhier, *Bergson dans l'histoire de la pensée occidentale*. Chapitre Premier “Bergson et la culture classique”におけるギリシア・ローマの古典的教養の教授について」の続編と言うべきものである¹⁾。前作では、哲学史家グイエ（Henri Gouhier, 1898-1994）の著作である *Bergson dans l'histoire de la pensée occidentale*, Vrin, 1959. の第一章 “Bergson et la culture classique” を取り扱った。本ノートは、Chapitre VIII “Le Dieu de *L'Évolution créatrice*” に焦点を充て²⁾、その全容を紹介しようとしたものである。

Bergson dans l'histoire de la pensée occidentale. は、ベルクソン（Henri Bergson, 1859-1941）をヘレニズムとヘブライズムという西洋古典思想史の観点から論及したものである。各章の題目を訳出すると、第一章「ベルクソンと古典的教養」、第二章「エレア学派ゼノンの詭弁」、第三章「ベルクソン哲学史と科学史」、第四章「原因性と創造」、第五章「経験与件としての創造」、第六章「〈生ける永遠〉」、第七章「哲学におけるベルクソン史」、第八章「『創造的進化』の神」、

第九章「創造的人格」、第十章「〈神秘主義を学ぶ〉」、第十一章「ギリシア神秘主義とキリスト教神秘主義」、第十二章「新哲学としてのベルクソン哲学」となる。

本ノートでは、第八章「『創造的進化』の神」（Chapitre VIII “Le Dieu de *L'Évolution créatrice*”）の全文を訳出し、全容の紹介を試みたい。

Chapitre VIII “Le Dieu de *L'Évolution créatrice*” の全文全容

ベルクソンは『創造的進化』を執筆した時、果たして神については考えていたのであろうか。確かであることは、神は存在しないと考えていたということである。もっと正確に言えば、アリストテレスの神は存在しないと考えていたのである。1903-1904 年期においてコレージュ＝ド＝フランスで行なわれた講義の中で、アリストテレス『形而上学』第11巻（lambda）に関して長々とした考究がなされている。

ベルクソンが言うところの短くも重要な概略を読んでみよう。「こうした説明の詳細に関しては、教授はいつもアリストテレスのテキストとアレクサンドルの註釈とを比較していた」、すなわちアレクサンドル＝アプロディシアスの『運命論』の概略のことである。ベルクソンは続ける、「全体から言って著作の註釈に関して

八戸大学ビジネス学部ビジネス学科

は、とりわけ何よりもアリストテレスが〈不動なる第一の動者〉の観念と〈思惟の思惟〉の観念との間に確立した関係性の正確な意味を明確化することが試みられていた」。

アリストテレスに関するあらゆる研究は、アイデアに関するアリストテレスの理論に立ち帰ることから始めなければならない。「……それ故に、アイデアはそれ自体として存在しなければならない。古代哲学は、こうした結論から抜け出すことは出来ていない。プラトンが表出したのは、こうしたことなのである」。従って、「アリストテレスがそうした脱出を試みるも、徒労に終わっただけであった」。実際に、運動とは不変性の頹落によって発生するものなので、そこには動きも存せず、それ故に感覚的世界も存せず、もしそこに存しないとすれば、何処かで不変性が現実化されているのである。アリストテレスの神という或る種の創造力豊かな発想に続いて行こう。

「従って、独立した存在をアイデアから取り出すことより始めたにもかかわらず、それなしで済ませてしまい、アリストテレスはそれらを雪達磨のように拾い集めることで、どうかそれらを削除したのであり、このような訳で、形相の形相、アイデアのアイデア、或いは要するに、彼の表現を用いてみるならば、思惟の思惟とされる形相を、自然的世界の上に置いたのである。アリストテレスの神とは、そのようなものである」。

もし言及することが可能であるならば、「必然的な不変性」というこうした神の属性に続いてみよう。運動はそれ自体は動くことをしない動者を始原としているので、自然学はここで形而上学と接合するのである。同様にこうした神は必然的に「世界において生起するところのこうしたものの局外者」であると言わなければならない。従ってそれ自身は思惟するも、世界を思惟するところの思惟ではないところの思惟である。ベルクソンは次のように記した時には、キリスト教化されたアリストテレス主義を意図

していたのであろうか。「アリストテレスの神の内において、プラトンのアイデアを探してみても、徒労に終わるだけである」と。但し、「想像する」ことが出来るのは、次のようなベルクソンの言葉である。「アリストテレスの神は、自らの外側にプラトンのアイデアを瞬間に流出させているように思われる世界の方向に傾いている」と。

アリストテレスの神に関するこれらの貢において、ベルクソンは即座には自らの解釈と批判的な解説とを混合させてはいない。明白であることは、哲学のベルクソン史における位置付けを通じてでさえ、こうしたアリストテレスの神は、ベルクソンのそれであるとは見なしてはいないのである。実際に、「生成が実在である」とする形而上学においては、どのようにして、所謂「事象」に外在する、不動であるはずの、第一なるものとしての動者において、神を認識するのであろうか。エレア学派のゼノンの詭弁を有名にした根本的な誤りは、必然的に後代の全哲学を歪めてしまった、というのは何故ならば、ゼノンの詭弁は動きであるところの動く者をその軌道と自発的に置換してしまったり、同一性の観点で変化を思弁した知性という作品を生成させてしまったからである。

『創造的進化』の読者は、それ故に神は存しないと理解してしまった。神は存するとは考えはしないのであろうか。あまりにも言われていることであろう、しかしながら、著名なテキストは我々に神が存する場を語り、そういう訳で神を探す場を教えてくれるのである。

ベルクソンの文筆による著名なテキストは勿論のこと、ベルクソンの哲学においても、従って、既にベルクソンの意味を伴って、「神」という語は初めて否定として登場するのである。

ベルクソンは著作の題目において、形容詞が導入するところの新たな明証を想起したばかりである。「創造的」であるところの進化が重要なのである。ところで、創造の観念は即座に、

我々をギリシア＝ラテン的視座の外部に我々を置いてしまう。創造の観念は、ユダヤ＝キリスト教的思惟が公認される時代に至るまでは、古典古代の偉大なる学説にあっては、外様であった。にもかかわらず、そこに見受けるのは、ベルクソンは哲学史において創造の観念を見出してはいないけれども、意識の直接与件においてはそうしたのである。

ベルクソンは従って、次のように記している。「あたかも悟性がそうせずには居られないのであるかのように、創造されたものと創造するものと考えてみるならば、創造の観念において、万象は謎だらけである。こうした錯覚は、我々の知性において、本質的に実践的な機能において、物事を表象するための事実やとても変異する状態や行為においては自然的である」。けれども、置時計で計量された時間の下で再発見された持続から上手に導き出された経験において得られたものであった時でも、もはやこうした観念が明白である訳ではない。概略を話そう。それに先立つ二つの著作において、ベルクソンは心理的作用において、創造の観念と遭遇した。『創造的進化』においては、生物学的有用性において、創造の観念と遭遇した。我々はそのようにして、宇宙論的有用性の問いを定立する瞬間にまで到達するのである。換言するならば、同様の図式は発明がある至るところで、意義が有されるのである。それは自由な行為としての創造的自我なのであろうか、それは種の創造者としてのエラン＝ヴィタルなのであろうか、それは宇宙の創造主としての第一原因であると付言し得るのであろうか。けれども、理解しなければならないことは、宇宙は単に我々の世界であるだけではなくて、世界の全体なのである。恐らく我々は自分たちの世界とは別の世界の認識を有することは決してあるまい。けれども、認識不可能な世界という仮想に異論がないとするならば、同様の図式は創造というものを思惟するために意義あるものとなるのである。従って、それは神という語がベルクソン哲学の内部

において初めて顕現されるこうした宇宙の恒常不変的な始原であろうところの第一原因の契機においてなのである。

「それにもかかわらず、遂行されたことが同種の行動であるならば、巨大な打ち上げ花火の狼煙のように、—その中心をものとしてではなくて、噴出の連続として常に供与されたところの一諸世界が噴き出すところの中心と言う時に、単純にそのような最もらしい類似でもって、言い表しているのである」。そして、『創造的進化』の著者は記している。「そのように定義された神とは、全きに完成されたものではない。それは不断の生であり、行動であり、自由である」。然らば、こうした長文の始まりにおいて言い表された「錯覚」に戻ってみると、ベルクソンは次のように確認している。「そのようにして考えられた創造とは、神秘ではない。我々は自由に行動するや否や、我々の中に創造を体験するのである」。

「そのようにして定義された神……」。それ故に、神は定義される。こうした定義は、果たして新しいものなのだろうか。

アリストテレスの神のように、『創造的進化』の神は宇宙論的な神である。ここかしこで、世界との関係から出発して、世界との関係の内において到達した。けれども、それは同じ世界でもなければ、同じ宇宙でもない。

アリストテレスの影響が窺える論題とは、運動である。知性はそのようにして、原因性の第一原因という軍団に、すなわち動者の存しない動きではなくて、原因や動き、そして効果であった動者に関与する。いったん動き出した状態となると、知性はまさに止まらなければならない瞬間にまで原因性の効用を上昇させる、すなわちまず第一には不動でなければならないので、いわゆる不動なる第一の動者を設定するのである。

あらゆるこうした証明事項は、知性の産物である。創造が問題とされることは、全くと言ってない。聖トマスがアリストテレスの洗礼を受

けることになる時も、また然りである。聖トマスは神の存在を認識するために理性を導く五つの道すがらを素描している。すなわち、「最初にして最高のマニフェストは、動きから始まる場所のものである」と。こうした五つの道すがらは、『神学大全』の冒頭部、第一部、第二問、第十一論に見受けられる。聖トマスは続いて神の属性について検討する。第四十四問では専ら、創造について取り組まれている。問いは知性によって措定されたものであり、明らかに原因性の観点において考察されたものである。運動の第一原因は、万象の第一原因としての、万象の第一原因なのであるか。

他の全ては、ベルクソンの視点である。創造的活動は、本質上は、神的なる行為ではない。哲学はそのことと遭遇するがために、神の問題には遭遇し得ない。厳密な意味で考察した場合、通常発明と呼ぶところのものは、意識の直接与件のことである。そのようなものなので、それが種の創造主である時、発明とは我々に精神的生や進化を考えさせることを可能ならしめる模範なのである。ここまで来ると、神の問題ではなくなる。恐らくは、アリストテレスが動きの始原に神を想定した時にそのことに遭遇したのと同様に、ベルクソンもまた創造的力の始原に神を想定した時に、そのことと遭遇したのである。けれども、そこには二つの厳密なる差異がある。

1. 不動なる第一の動者の存在についてのアリストテレスの証明は、原因性の原理を支えとする理性によって為されたものである。このことは、アリストテレスにおいてと同様に、聖トマスにおいても然り。ベルクソン哲学においては、創造的な行為とは理性のそれではないけれども、良く導かれた経験を獲得しているところの明証を享受している。そこには原因における以上に結果においてより以上のものが存するので、原因性の原理が介在しないところのものを付加してみても、徒労に終るだけである。

2. アリストテレス哲学においては、不動な

る第一の動者は動きの原因ではあるけれども、動きが生ずるところの世界内における存在でもなければ、永遠なる世界における永遠なる動きであるわけでもない。聖トマスがアリストテレスの哲学を再利用した時、こうした第一原因が世界の創造主であることも同様に証明しなければならなかった。『創造的進化』の神は、言うなれば、創造的作用の実行において、認識されたのである。それは、そうした定義においても、見受けられるのである。

『創造的進化』の有名な頁において、神について語らなければならない全てのことをベルクソンが述べたのかどうかは定かではない。その箇所を読んでみると、R.P.J. トンケデックは二つの指摘を行なっている。1. 噴出とは、それらが噴き出すところの自然そのものなのであるか。換言すれば、「ベルクソン氏は一元論なのであるか」。2. そうした噴出は語彙における本来の意味での創造、すなわちそこには観念ですらも有し得ない、全くもって想像だに付かない無であるところの、哲学における無からの創造なのであるか。

R.P. トンケデックのこうした二つ目の注意を前にして、ベルクソンは返答する。無の不可能性に関する自分の論証は、単に常に存在していた或るものを証明するという結論に到達したのである。書物の中の無とは、世界であるところのものが常に存在したと理解するがままにさせておくしかないのである。最初の注意に関しては、ベルクソンはベルクソン哲学の論法そのものが、一元論と汎神論とを回避していると考えている。けれども、ここには重要な秘密がある。

1912年において、R.P. トンケデックはベルクソンに1908年の対話に付加するものがあるかどうかを問うている。ベルクソンはその時に、自分の哲学の科学的要望について想念している。「哲学である限りにおいては、自分は目下のところ、付加すべきものは何も見当たらない」と。人間である限りにおいては、確実な見解に到達したと感ずることさえない場合は、神に関

して省察することに、このことは意味がないのである。けれども、「自分が理解しているような哲学の方法は、(内在的であるにせよ外在的であるにせよ) 経験の厳密なる模倣であり、そして、それが基盤としているところの経験的考察を超えようとしているところの結論を陳述することを認めはしないのである」。三著作の結論を思い返してみよう、学位論文に関しては「自由としての行為」、『物質と記憶』に関しては「精神としての実在」、最後のものに関しては「行為としての創造」であり、「これら全てのものに関して記されていることと言えば、明らかに創造主であるところの神や自由の観念から解放されていて、物質と生命とが同時に生成されること」であり、しかもこのことは「一元論と汎神論とを拒絶することを暗示している」のである。けれども、そこには精神の視座が存する。ベルクソンは「哲学者である限りにおいては」まだ、この主題について語る準備をしてはいない。しかしながら、R.P. トンケデックの手紙はそれが準備されていることを教えてくれており、こうした用意は創造の努力に続くところのものにおいて存して、種の創造の後に、「人間の人間性の構築によって」継続されていて、そのような構築は「道徳上の問題」の構築において、指摘されなければならないのである。

そのようなわけで、もはや宇宙論的な神の問題ではなくなるのである。そのことを知ることなく、ベルクソンは1932年に出版されることになる著作、その題目が『道徳と宗教の二源泉』であるところの著作を用意するのである。

遙かに先の数頁で再現されている。「生命は中心から発出されて拡張される膨大な波の如く、全体として顕現される」(288頁)。

- (7) 『神学大全』第1部第2問第3論, A.D. セルティランジュ訳, パリ, 『青年誌』出版部, デクレ社, 1925年。
- (8) 同上, 第24問, 題目『神からの創造的発出と全体の第一原因について』。
- (9) 同上, 第4章, 46頁。
- (10) ここに、四つの文献が存する。1. J.ド=トンケデック『世界の秩序を如何に解釈するのか』、『学術誌』において、1908年5月5日。2. ベルクソンからド=トンケデック神父へ、1908年5月12日。3. J.ド=トンケデック『ベルクソン氏は一元論者であるのか』、『学術誌』において、1912年2月20日。4. ベルクソンからトンケデックへ、1912年2月20日。これらの全文献は、J.ド=トンケデックによって再版されることになる、『ベルクソン哲学に関して』, パリ, ポシェンス, 1936年。ベルクソンの2つの書簡は、1912年2月20日に『学術誌』上で刊行される。『小論集』において、ベルクソンの最初の手紙の要約のみが766-767頁で、そして2番目の手紙が963-964頁で見受けられる。
- (11) ド=トンケデック神父宛て、1908年5月12日。『小論集』, 766-767頁。
- (12) 同上, 766頁。同, 1912年2月27日, 964頁。
- (13) ド=トンケデック神父へ、1912年2月20日, 964頁。

ま と め

Chapitre VIII “Le Dieu de *L'Évolution créatrice*”を要約すると、次のようになる。本章は、ベルクソンの神観念が、アリストテレス (Aristotélès, 384-322.BC) や聖トマス (St. Thōmās Aquinās, 1225-1274) の神観念、すなわち〈不動なる第一の動者〉 (*proton kinoun akinéton, premier moteur immobile*) と如何なる関係あるのかと

原 註

- (1) 『小論集』, 613頁。前掲参照, 20頁, 71頁。
- (2) 『創造的進化』, 347-348頁。
- (3) 同上, 338頁。前掲, 第2章, 第36節。
- (4) 前掲, 第5章。
- (5) 『創造的進化』, 269頁 (705-706)。
- (6) 同上, 270頁 (706)。中心のイメージは、

いう事柄から論考が始められている。つまり、『創造的進化』(L'évolution créatrice, 1907)を執筆した時、ベルクソンはアリストテレスの神を懐疑していたというのである。

アリストテレス哲学において、運動はそれ自体は動くことをしない第一の動者としての神を始原としている。ベルクソン哲学のような〈生成こそが実在である〉とする形而上学においては、どうして〈不動なる第一の動者〉に神を見出し、認識することができるのであろうか。そもそもは、エレア学派のゼノン(460.BC頃)の詭弁が後代の哲学を歪めてしまった、というのは何故ならば、ゼノンの詭弁は動きであるはずのものをその軌道に置換させてしまったり、同一性の観点で変化を思弁した知性というものを生成してしまっただからである。

『創造的進化』の第三章で、ベルクソンは神について言及する。「そのようにして定義された神とは、全きに完成されたものではない。それは不断の生であり、創造であり、自由である」(L'évolution créatrice, PUE, p. 249)と。『創造的進化』の神は、〈不動なる第一の動者〉と相容れるものではないが、アリストテレスの神のように、宇宙論的な神ではあるのである。

アリストテレスにおいては、創造が問題とされることはない。聖トマスがアリストテレスの洗礼を受けることになる時も、また然り。ベルクソンの視点においても、創造的活動は本性上では神的行為ではない。アリストテレスが動きの始原に神を想定した時と同じく、ベルクソンが創造的力の始原に神を想定した時に、精神的生や進化を考える場合、発明というものがそうしたものの模範となるのだということに遭遇した。けれども、両者には厳密なる差異がある。

〈不動なる第一の動者〉に関するアリストテレスと聖トマスの証明は、理性によるものである。ベルクソン哲学における創造的行為とは、理性によるものではないが、経験によって良く導かれたものによって明証される。聖トマスがアリストテレス哲学を再利用した時、第一原因

としての〈不動なる第一の動者〉が世界の創造主であることも証明しなけりなかつた。『創造的進化』の神は、そうした創造的作用の実行において認識されたのである。

R.P. トンケデックの指摘に対して、ベルクソンは自分の哲学が一元論と汎神論とを回避している旨を述べている。そして、ベルクソンは哲学の方法というものを経験の厳密なる模倣と考え、経験的考察を超えるところのものを陳述しようとすることを認可してはいないとのことである。

結 語

アリストテレス、聖トマスにとっての神、すなわち究極の原理とは、〈不動なる第一の動者〉である。その一方で、〈持続〉(durée)を中心概念とするベルクソン哲学にとっては、〈不動なる第一の動者〉に普遍性を観たスコラ哲学の伝統は、背理的なものとなってしまうであろう。

〈不動なる第一の動者〉をベルクソン哲学に位置付けることが困難となると、ベルクソンの世界観は、一元論ないし汎神論となるのであろうか。ベルクソンは少なくとも、一元論、汎神論に陥ることは回避しようと模索していたことは間違いのないことであろう。

註

- 1) 拙稿「Henri Gouhier, *Bergson dans l'histoire de la pensée occidentale*. Chapitre Premier “Bergson et la culture classique”におけるギリシア・ローマの古典的教養の教授について」、『八戸大学紀要』第43号、2011年、45-49頁。
- 2) 本ノートでの使用テキストは、Henri Gouhier, *Bergson dans l'histoire de la pensée occidentale*, Paris, Vrin, 1989. Chapitre VIII “Le Dieu de *L'Évolution créatrice*”, pp. 79-85. を取り扱った。

土屋靖明：Henri Gouhier, *Bergson dans l'histoire de la pensée occidentale*, Chapitre VIII “Le Dieu de *L'Évolution créatrice*”におけるアリストテレスと聖トマスの神について

付記：本稿は2011年10月23日（日）に弘前大学で開催された第61回東北哲学会での発表原稿を加筆修正したものである。御意見御感想等を下された方々に、この場を借りて謝意を示したい。訳

出した箇所の意味不明の文言も多少なりとも見受けられ、批判的な御指摘等をも頂戴したが、そうしたコメントもまた、原稿を再考する上でとても参考にさせて頂けた次第である。